

一八八四年九月七日(日)

タクール、聖ラーマクリシュナ、ドツキネーシヨル南神寺において——ラーム、バブラーム、
校長、チュニー、アダル、バヴァナート、ニランジャン等の信者たちと共に

タクール自ら語られる生涯——ゴシュパラ派とカルタバジャ派の信条

タクール、聖ラーマクリシュナは、ドツキネーシヨル南神寺のあの部屋で小ベッドの上にご自分の坐法を組まれ、信者たちに囲まれて坐つていらつしやる。時間は午前十一時になるが、まだ昼食を召し上がっていない。昨日の土曜日、タクールはアダル・セン氏の邸を信者たちと共に訪ねられた。ハリ称名キールタンの盛大な催しで、一同大満足であった。今日はここで、シャームダースのキールタン歌唱がある。タクールがキールタンを楽しまれるのを拝見しようと、大勢の信者たちが集まつてきている。

はじめにバブラーム、校長、シユリラムプールのバラモン、マノモハン、バヴァナート、キシヨリー。その後でチュニラル、ハリバダたち。つづいてムクジエー兄弟、ラーム、スレンドラ、ターラク、アダル、ニランジャンたちがやつて来た。ラトウ、ハリシユと、ハズラーは、このころドツキネーシヨル南神村に住みこんでいる。ラームラルさんが大実母マカーリーのお供えその他の奉仕をして、それからタクールのお世話をす

るのだ。ラーム・チャクラバルティー氏はヴィシユヌ殿の奉仕をしている。彼も時々来ては、タクールのお世話をする。もちろんラトウとハリシユもタクールにお仕えしている。今日は日曜日でバッドロ月黒分二日目。一八八四年九月七日。ベンガル暦二二九一年バッドロ月二十三日。

校長が入ってきてごあいさつした後、タクールはお聞きになった——「おや、ナレンドラは来ないのかい?」

その日、ナレンドラは来ることができなかった。シユリラムプールのバラモンがラームプரசಾದの詩の本を持参し、その中から時々、詩のひろい読みをしてタクールにお聞かせしている。

聖ラーマクリシュナ「さあ、また読んでくれないか」

バラモン「装束ころもをつけ給え。母よ、装束をつけ給え。母よ、装束をつけ給え」

聖ラーマクリシュナ「そんなのはよしてくれ、面白くもない! 信仰を呼びさますようなのを読んでくれ」

バラモン「大実母マカーリーの何たるかを知るは誰か、六派の哲学はるかに及ばず……」

〔タクールの聖者に対する親愛の情——バラマハンサ、吟遊僧バウラ、およびサイ〕

聖ラーマクリシュナ「(校長に)昨日、アダル・センの家で半三昧のときに、片方の足が痛くなった。

これからはバブラームを連れていこう。思いやりがあつてよく気が付くから!」

こうおっしゃってから、タクールは歌をうたわれた——

心のたけを語ろうにも

それは固く止められている

思いやりのある人がいなけりや

命の炎は消えるだけ

その目をジッとみつめたら

心の友はすぐわかる

浄らかな愛の海に入り

甘露の水面みなもで泳ぐのは

わずかに一人か、また二人(バーヴァの状態になる人のこと)

心の友よ、どこで出会える

脇には彼のボロ布かかえ

口をきいてはくれませぬ

心の友はさざ波の道を行ったり来たり

「ヴィシユヌ派の吟遊僧はこういう歌をうたうんだ。それから、こんなのも——」

托鉢たくはつの坊さん、お待ちなされ

受け鉢を手にしたそのお姿を

しかと拝ませていただきましょう！

「シヤクテイ派では靈的完成者シッダをコウロと呼ぶ。ヴェーターンタ派ではパラマハンサという。ヴィシユヌ派の吟遊僧バウルたちはサイという。サイの上はもうない！」

吟遊僧バウルが靈的に完成するとサイになる。そうなるとあらゆるものが不異おなじだ。半分が牡牛おうしの骨、半分がトウルシーの木でつくった首飾りをする。

ヒンドゥー教の人は彼のことをニール水と呼び、イスラム教の人ムスリムはビール聖者と呼ぶ」

〔アレク不可解なるもの——靈気について——靈的な段階〕

「サイたちは、『アレク！ アレク！』と言う。あれはヴェーターダのブラフマンのことだ。彼らはそれをアレク——不可解なるもの——と言うんだよ。生き物のことを、アレクより来たりて、アレクに去る——と言う。つまり、個々の魂は形なきもの無相から出て来て、そこへまた戻って溶け込むのだ！」

彼らは、『風のことについて知っているか?』と言う。

つまりそれは、クンダリニーが目覚めると、イダー、ピンガラー、スシユムナー——これらの中を通って、大きな靈氣マハ・ヴァーグ・アーユの流れが上がっていく、そのことについてなんだ!

『どの段階にいますか?』と質問する。六つの段階が、ヨーガで言う六つの中枢チャクラに当たるんだよ。

もし、『五番目のところですよ』と答えたとしたら、その人はヴィシユッタ・チャクラまで心が上がっているということなんだよ。

(校長に向かつて) そのとき、形なきものを見るんだよ。歌にあるように——」

こうおっしゃってからは、タクールは少し節をつけて次の句を口にされた——「この蓮の花弁のなかに幽かな空間があり、ここを超えらるとついに宇宙は消え去る」

〔以前の話し——吟遊僧バウッルとゴシユバラ派やカルタバジャ派の人が来たこと——さとうきび汁を煮つめる仕事、鍋を下ろすこと

「一人の吟遊僧バウッルが来ていた。わたしは、『さとうきび汁を煮つめる仕事はすっかり済んだかね?』と聞いてみた。『鍋は下ろしたかい?』と。さとうきび汁は煮れば煮るほど甘くなる。最初はただのさとうきびの汁だ。それから糖蜜になり、黒砂糖になる。それから砂糖になって、それから氷砂糖になる。だんだん精製されてくるんだよ。

何時鍋を下ろすか? つまり修行が終わるのはいつか? —— 感覚器官を支配できるようになった

ときだ。ヒルの体に石灰をつけるとヒルは自然に離れて落ちるように、感覺器官が自然に緩んでくる。女といつしよに暮らしても色情を起こさない(性交しない)。

吟遊僧たちの多くはラーダー・タントラの方法を実行している。五元素の原理で修行するわけだ。地の原理、水の原理、火の原理、風の原理、空の原理——糞、尿、経血、精液、これもみんな原理なんだよ！ こういう修行はとても汚い修行だ。ちょうど便所につづく勝手口を通つて家に入るようなものさ！

ある日、わたしが大広間で食事をしていると、ゴシユパラ派の人がひとりやって来た。来てこう言うんだよ——『あんたは自分で食べているんですか？ それとも、誰かに食べさせているんですか？』つまり、完成した人は人間の内奥に至聖がいらつしやることが見える、というわけなんだよ！

この宗派で完成した人たちは、他の宗派の人たちのことを、人間と呼ぶ。自分たちと違う宗派やカーストの人がいても話をしない。『ここに、よそ者がいる』と言うわけさ！

〔以前の話し——生誕地を訪ねる。シャリー・パタールの家にフリダイと行ったこと〕

「郷里でこの派の人を一人見たよ。シャリー(サラスワティー)・パタールという女の人だ。この宗派の人はお互いの家で食事するが、ほかの派の人の家では食べない。マリツクたちはシャリー・パタールの家に行つて食べたが、フリダイの家では食べなかつた。あれたちは人間だと言つて——。ハハハハ。(訳註——フリダイはバラモン階級、シャリー・パタールは低いカーストではあるが同じ宗派の人。この宗

派は自分の宗派に対する強いプライドがあるようである。一般にヒンドゥー教では、自分よりも低いカーストの人とは一緒に食事をしない)

わたしはある日、その人の家にフリダイといっしょにぶらぶら行ってみた。トゥルシーの木が見事に茂っていたよ。コライ(揚げた豆)とムリ(煎り米)をませて出してくれたから、二つまみほど食べた。フリダイはまた沢山食べてね——あとで腹をこわしたよ!

連中は霊的に完成した状態のことを、サハジャ(素直)な境地と言っている。彼らのなかの或る人たちは、^クサハジャ、サハジャ^クと言つて絶えず叫んでいる。サハジャの境涯には二つの特徴^{しるし}がある。第一に——クリシュナを臭わせない。第二に——蓮の花に蜂がとまっても蜜を吸おうとしない。^ククリシュナを臭わせない^クということは、その人の心は神との親密感でいっぱいになっているからだ。外には何の徴^{しるし}も見せない——ハリの名さえ唱えない。もう一つの方の意味は、女に執着がない——官能を支配しているということだ。

彼らは、神像などの中におられる神を^{タクイール}拝むことは一切、ライクしない(好まない)。生き身の人間が いいのだ。それだから、あの中の一派をカルタバジャというんだよ。つまり、カルター(グル)を神として、バジャナする(押し仕える——ブージャをする)というわけだ」

聖ラーマクリシュナと万教調和——すべての聖典、すべての宗教が真実である理由

Why all scriptures — all Religions — are true.

聖ラーマクリシュナ「どんなにたくさんの方の考え方があつたらう! それぞれの考え方が

神に至る道だ。無限の考え方、無限の道！」

バヴァナート「じゃあ、どうすればいいんでしょう！」

聖ラーマクリシュナ「一つの道を、しっかりとつかむことだよ。屋根に出るには石の階段を上つても行けるし、ハシゴをかけても上れる。縄ばしごを使ってもいい。電信柱によじのぼっても、竹ざおを使つても上れる。でも、これにちょっと足をのつけてみたり、又、別なものに足をかけてみたりしては上れないよ。一つの道をしっかりとつかんでいなけりゃいけない。神様をつかむには、一つの道をしつかり守って力いっぱい進んで行くことだ。

ほかのたくさんの道も、ひとつ、ひとつ、みな神に行く道だということを心得ていなさい。自分の正しい道だが、ほかの人の道はみな間違いだ、などと決して思わんことだ。ねたんだり、憎んだりしないことだ」

〔わたしはどの道？ ケーシャブ、シャシャダル、ヴィジャイの意見〕

「さて、するとわたしはどの道に属しているんだろうね？ ケーシャブ・センはよく言つてたものだよ。『あなた様は我々と同じ考え方です——神は無相無形なりというところに来ておられる』シャシャダルは、『この方は我々と同じ道であられる』と言つた。ヴィジャイ（ゴースワミー）も、『この方は我々と同じ考え方の人だ』と言つたし——」

タクールは、^{かみ}自分はすべての道を通つて至聖のそばに着いた。だから、いろんな道の消息を知つ

ている」ということをおっしゃったのだろうか？　そして、すべての宗教の人が自分のところに来て心の平安を得ることができると？」

タクールは五聖樹パンチャバティの杜の方へ、校長はじめ二、三の信者たちと行かれた。お顔を洗いに行かれたのだった。時間は十二時で、高潮が押し寄せてくる時間なのだ。それでタクールは、五聖樹パンチャバティの杜の道のところまで少し待っていらつしやる。

〔バーヴァ、マハーバーヴァの本質——ガンガーの満干潮を見る〕

信者たちが話し合っている——「潮の満ち引きは、実に不思議なものですねえ！」

聖ラーマクリシュナ「でも、ひとつよく見てごらん——河の中で潮の満ち引きが起こるのは、海の近くだけだ。海からずっと遠くに離れたところでは、河は一方にだけ向かって流れている。これはどういう意味だね？　これがどういふことか、よく考えてみる。神のすぐ近くまで来ている人たちの内部なかには、信仰、バーヴァ（法悦）、こういったものが起こる。それに一人か二人（イシヨラコーテ）（神の分身）には、マハーバーヴァ（ブレイマ）も愛も生じる。

（校長に向かつて）——それはそうと、潮の満ち引きはなぜ起こるんだい？」

校長「イギリスの天文学ではこう説明しております——つまり、太陽と月の引力によってかかる現象が起こるのだと——」

こう言いながら校長は地面に図を描いて、地球、月、太陽の動きを説明した。タクールはちよつ

と見つめておられたが——「やめとくれ、それを見ていると頭がズキズキ痛くなってきた！」とおっしゃった。

話をしているうちに、潮が上がってきた。見る見るうちに河の水は膨れ上がり、潮の押し寄せる音がしてきた。神殿の立つ岸を洗いながら、北の方へと矢のような勢いで突き進んでいく。

タクールは目を据えて見ておられる。遠くにいる小舟を見て、子供のように叫ばれた——「あれ、あれ、あの小舟はどうなるんだらう！」

タクールは五聖樹バンチャバティの杜の木の根元に、校長と話をなさりながら来られた。傘を一本持っておられて、それを五聖樹の下の台座にお置きになった。タクールは、ナラヤンのことをナーラーヤナの顕現と見ておられて、彼を大そう愛していらっしやる。ナラヤンは学生なのだが、こんどは彼のこと話題に上がった。

「校長への教訓——金の正しい使い方——ナラヤンへの心づかい」

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かって) ナラヤンはどんな性質だと思う? 誰とも付き合うことができる——若い者とも年寄りとも——皆と付き合ってる! これは特別な力がなくちゃできないことだ。それに、みんなが彼を好いている。うんそうだ、彼はほんとに素直な性質だと思ukai?」

校長「はい、とても素直な人だと思います」

聖ラーマクリシュナ「お前のところに行くようだね?」

校長「はい。一、二度まいりました」

聖ラーマクリシユナ「タカくらい、お前、彼にやってくれないか？ それともカーリーに頼もうか？」

校長「はあ、よろしゅうございますとも、私があげます」

聖ラーマクリシユナ「そりゃいい。神を熱心に求めている人たちを援けるのは良いことだよ。金は正しく使わなけりゃいけない。全部自分の家族のことだけに使つては、何にもならんよ」

キシヨリーには大勢の子供がいる。月給が少ないので十分なことができない。タクールは校長におつしやる——「ナラヤンが、『キシヨリーに仕事を見つけてあげましょう』と言つていた。ナラヤンに一度、催促してみてくれないか」(訳註、キシヨリー・モハン・グプタ。マヘンドラ・ナート・グプタの弟)

校長は五聖樹パンチャパテイの杜で待つていた。タクールは間もなくジャウタラからお戻りになった。そして校長におつしやつた——「部屋の外にゴザをひろげておくように言つてくれ。わたしは、も少ししたら行くから——。ちよつと横になつて休もう」

タクールは部屋に戻られてからおつしやつた。——「お前たちときたら、誰もカサを持つてくることに気が付かない(皆笑う)。そそっかしい人間は、すぐそばに置いてある物も目に入らないんだ！ ある人が、別の人の家にタバコの火種をもらいに行つたら、なんと自分の手に灯のついた提灯ちようちんを持つていたとさ！

ある人がタオルを探し回つてからヒヨイと見たら、自分の肩にかかつていたとさ！」

〔タクールのお昼食と従者のバブラームたち〕

タクールのために大実母カーリーのお供えもの^{プラサード}が運んでこられた。タクールは昼ごはんを召し上がるのだ。時間は午後一時頃になっている。食後は少し横になってお休みになることになっている。信者たちはそれでもまだ、皆、部屋のなかに坐っている。外に出るように言われて皆、それに従って外に出て坐った。ハリシユ、ニランジャン、ハリパダの三人は食堂へ行つて、供物のお下がりをいただくらしい。タクールはハリシユに向かつて、「お前たちの食べるアムシヨット（マンゴーのお菓子）を持つていけ」とおっしゃった。

タクールは横になつて休んでいらつしやる。バブラームに——「バブラーム、ちよつとここへ来ないか？」とおっしゃった。バブラームは、「いま、バーンをこしらえていますので——」と言つた。（訳註：バーン——きんまの葉やびんろうじゆの実でつくつた噛みタバコのようなもの）

聖ラーマクリシュナ「バーンをこさえるのなんか、ほつとけよ」

タクールが休んでおられる間、バクル樹台^{タラ}や五聖樹^{パンチャパテイ}の杜に数人の信者たちが坐っている——ムクジー兄弟、チュニラル、ハリパダ、バヴァナート、ターラクたちだ。ターラクはプリンダーヴァンから帰つたばかりであつた。信者たちはプリンダーヴァンの話をターラクからきいている。ターラクはニティヤゴパールといつしよにプリンダーヴァンにしばらく滞在していた。

信者たちとキールタンを樂しむ——信者たちと踊る

タクールは少しお休みになった。シャームダースは、連れてきた樂手たちとマトウラーのキールタンをうたいはじめた——「主にまみえる喜びと」

主にまみえる喜びと——

次に

氣持ちよさそうな湖も

砂漠のように思われて

雲をみながらチャタク鳥は

渴きのために死にました

シュリーマティ

聖女(ラーダー)のこの別離の悲しみを描く歌を聴いて、タクールは前三昧状態になられた。タクールは小ベッドの上に座を組まれ、バブラーム、ニランジャン、ラーム、マノモハン、校長、スレンドラ、バヴァナート等信者たちは床の上に坐っている。しかし、どうも歌で靈的な雰囲気盛り上がらない。

コンナガルのナヴァイ・チャイタニヤに、キールタンをうたうようにとタクールがおっしゃった。ナヴァイはマノモハンの叔父にあたる。年金をもらってコンナガルのガンガー河畔で毎日を修行と^{サーダナ}讚神歌で送っている人だ。始終、タクールにお会いするため此処に来ている。

ナヴァイは声を張り上げてキールタンを唱った。タクールは座から立ち上がって踊りはじめられた。すぐ、ナヴァイと他の信者たちは、このお方を取り巻きながら踊ったり歌ったりしはじめた。

キールタンはすばらしい雰囲気盛りに上がった。マヒマーチャランまでタクールといっしょに踊っている。

キールタンが終わると、タクールはご自分の席に戻ってお坐りになった。ハリの名を称えてから、こんどは歡喜の權化なる大実母の名を称えていらつしやる。タクールは恍惚となつて大実母の名を称えておられ、眼を上に向けたまま、まばたきもなさない。

タクールのうた

—— おお歡喜にあふれるあまり

マーよ 我を悲しませるなかれ

—— 深く想えば愛は生まれ

1884年9月7日(日)

愛ふかきほど源元みなもとふかく
つかみて信はゆるぎなし

おん母の足もと、甘露の海に
わが精神こころ つねに浸りてあれば
礼拝、護摩、供え物、すべて用なし

—— この世はあなたをつくった
騒がしくて気も狂いそうな市場
ここであなたのお徳について
とやかく言っても何になりましょう

お乗り物の象にも乗らずに
お行儀悪くほつつき歩き
玉や真珠をかなぐりすてて
頭骸骨のネックレスなど首にかけて

火葬場や死刑場がことのほか好き

どうどう廻りのぬきさしならぬこの世から
ラームプラサードを救い出して下さいまし

——
ガヤー、ガンガー、ブラバースや

カーシー、カーンチーに行かずとも

カーリー、カーリー、カーリーと呼んで

わたしや最期の息をひく

朝、昼、晩にカーリー呼べば

^{いのり}祈禱も^{つとめ}勤行も要りはせぬ

^{つとめ}勤行はあなたのそばまで行くが

決して^{いっしょ}一体になりはせぬ

慈善、誓願、賜りもの

そんなものには目もくれず

この世の愛をひとまとめ

1884年9月7日(日)

大実母^マの御足¹に捧げよう

カーリーの御名の不思議な力
それは誰にもわからない
神のなかの大神シヴァさえも
御名の光栄^{さかえ}を讃^{たた}えます

——心よ、自らの内^{なか}に住み
よそびとの家に行くなかれ
自らの奥^{おく}をふかく探^{さぐ}れば
求むるもの すべて得られん

一八八四年十月十九日に全訳あり

——わが心、黒蜂のごとく
シャーマの青き蓮華の御足に魅せられたり

——やさしいシャーマ母さん 胸に抱け
愛^{いと}しい母さん見えるのは

心よ、お前とわたしだけ
ほかの誰にも見えやせぬ

一八八三年十二月三十日に全訳あり

タクールは、この歌をうたいながらお立ちになった。大実母^{ママ}の愛に酔いしれてしまわれたのだ！^ッやさしいシャーマ母さん 胸に抱け^ッ という文句を、くりかえし、くりかえし信者たちにおっしゃった。タクールは酒を飲んで泥酔したような様子になられた。そして、踊りながら、またおうたいになる――

わたしの母さん^{ママ} なぜ黒い！

黒い肌したハダカの女

胸の蓮華に灯をともす！

タクールがうたいながら大きくよろけられたのを見て、ニランジャンがお支えした。タクールはやさしい声で――「行きな！ こいつ、さわるな」とおっしゃって押しやられた。タクールが踊っておられるのを見て、信者たち一同も立ち上がった。タクールは校長の腕をつかんでおっしゃった――「こいつめ、さあ踊れ」

〔ヴェーダーンテイストのマヒマーたちといっしょにサンキールタンを踊ってタクール喜ばれる〕
タクールはいつもの席にお坐りになった。法悦にすっかり酔ったようになっておられる！
やや平常に戻られると、「オーム、オーム、オーム。オーム、オーム……オーム、カーリー！」とおっしゃった。それから、「タバコを吸う」と言われた。信者たちのほとんどは立っている。マヒマーチャランは立ってタクールを扇いでいる。

聖ラーマクリシュナ（マヒマーに向かつて）あんたたち、お坐りよ。あんた、ヴェーダから何か聞かせて下さいよ」

マヒマーチャランは、ジヤジヤマンに勝利あれ。その他を朗誦した。
それからマヒマーチャランは、『マハー・ニルヴァーナ・タントラ』から讃詞を朗誦する――

オーム

敬礼す、世界の原因なる真理に

敬礼す、全人類を支え護る意識に

婦命す、二つなき一者、解脱を与えるものに

婦命す、ブラフマン、遍在する無相の大実在に

御身こそ 只唯一の依り処、われ仰ぎまつる

御身こそ 宇宙の第一原理 一切のものの魂 真我

御身こそ 世界の創造者 保持者 そして破壊者

御身は不可思議なる至上の主 絶対者 不変の意識

畏怖すべきもののなかの最も畏怖すべきものにして

一切のものの避難所 一切を浄化するもの

いと高きものたちの中の至高者 守護者たちの中の守護者

御身は不壊なる全能の主 無相にしてあらゆる形を現す

目にも見えず 耳にも聞こえぬ 真理そのものなり

御身は不思議 不滅にして一切所に遍在す

無相秘密の宇宙の光よ ^{ねが}希わくば我を災より護り給え

タクールは合掌して讃詞を聞いておられた。朗誦が終わると、うやうやしく頭を下げられた。信者たちも同じように敬礼をした。

アダルがカルカッタから来て、タクールにごあいさつした。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて) 今日はとても楽しかったね! マヒマー・チャクラバルティーはこっち(我々の仲間)の方へ来ている。ハリの名を唱えて喜んでいるのを見ただろう! ちがうかい?」

校長「おっしゃる通りです」

マヒマーチャランは智識ジニヤナの道を歩んでいる人である。今日、彼はハリの名を唱え、しかもキールタンのとき踊った。そのことでタクルルは、大いに満足していらっしやるのである。

日が暮れかかってきた。信者の多くは、次々とタクルルにお別れのごあいさつをして帰路についた。

プラヴリッティかニヴリッティか——アダルの仕事——世俗的目的のための祈りと就職

日が暮れた。寺の堂守りが長い南側のベランダ、そして西の半円形のベランダに明かりをともして行った。タクルルの部屋にはすでにランプがあかあかとともり、香が焚かれていた。間もなく月が昇り、堂塔のたたずまい、境内の道、ガンガーの岸辺、五聖樹パンチャパテイの杜、やぶの茂み、どこもかしこも月の光を浴びて心地よげに笑っている。

タクルルはいつもの場所で、専心ひんしんに大実母マの名を唱え、想っていらっしやる。

アダルが来て坐っていた。部屋には校長もニランジャンもいる。タクルルはアダルと話をなさる——聖ラーマクリシュナ「お前、今ごろ来たのかい！ ずいぶんキールタンや踊りをしたんだよ。シャームダースの歌——あれはラームの歌の先生だ。でも、わたしやあんまり感心しなかった。踊る気にもなれなかつた。あの人のことを後で聞いたよ。ゴープीडースの代理人——あの髪の毛のうすい男が言っていたんだが——私の髪の毛の数ほど妾めかけを持っている、と（一同笑う）。

お前さんの仕事は、うまくいかなかったのかい？」

アダルは現在、州庁の副知事で、三百タカの月給をとっている。このほどカルカッタ地方自治議会

の副議長の役を志願していた。こちらの方は月給が千タカである。この仕事を得るために、彼はカルカッタの大勢の有力者たちに会っていたのである。

〔ニヴリツテイがよろしい——就職のために心貧しきものは祈る〕

聖ラーマクリシュナ〔校長とニランジャンに向かつて〕ハズラーが言っていたがね——『アダルが望みの職につけるように、あなた、大実母¹にお願いなすつたら』と。アダルもわたしにそう言った。だからわたしは、少しばかり大実母¹にお願ひしたよ——『大実母¹、アダルはあなたのところによく来るから、出来ることなら望みを叶えてやっておくれ』でもすぐその後で、大実母¹にこう言ったよ——『大実母¹、でもアダルは何て心の貧しい男だろう！ 智慧や信仰を求めもしないで、あなたにこんなつまらんことをお願ひするとは——』ってね。

（アダルに向かつて）どうしてまた、そんなにロクでもない連中のところへ出入りしているんだね？ こんなに、いろんなことを見たり聞いたりしているのに！ ラーマーヤナの物語を全七巻すべて読んだ後で、『シーターは誰の奥さんですか！』なんて聞く頭の鈍い人もいる。

あのマリツクも心の貧しい男だ。いつだったか、わたしがマヘーシユへ行きたいと言ったら、船を用意してくれた。でも、彼の家に着いてから彼がフリダイに言うには——『おや、フリダイ、馬車はたのんでいないのかい？』とさ』

アダル「社会生活をしていますと、そういうこともしなくては生きていけません。あなた様も、い

けないとはおっしゃいませんでしたでしょうか?」

〔法悦狂状態のあと、給料受取りに署名するようにと会計係から呼ばれたこと〕

聖ラーマクリシユナ「ニヴリツテイ(内観心)が良いんだよ。ブラヴリツテイ(外に向かう心)は良くない。(神に酔って狂人のような状態だった一時期のあと)いまのような境地になつてから、わたしは給料の受取りに署名するようにと呼ばれた。会計係のところでもがするようになさ。わたしはこう言つたものさ——『そんなこと、わたしには出来ない。そんなもの欲しくない。あんたたち欲しけりゃ、誰にでもあげるよ』

わたしは神様の召使いだ。ほかの誰かに使われるとも思うのかい?

マリツクが、わたしの食事の時間が皆より遅いからといって、バラモンの料理人を一人雇つてくれ、費用にと一ヶ月に一タカよこした。さあ、それで恥ずかしくなつた。彼が呼ぶと、すぐとんで行かなくちゃならなかつた。——自分が行きたくて行くんなら別だがね。(訳註、給料は受け取らないと言つておきながら、マリツクが雇つた料理人に食事を作ってもらつていたから——)

心の貧しい人の祈り、希望、世間ではみんなこんなものだ」

〔以前のこと——狂気状態の後、タクールの望み——知足〕

「わたしはいまの境涯に落ち着いてから、自分の回りのことをいろいろ見て、すぐ大実母^{ママ}に向かつて

こう言った——『大実母^マ、(普通の人と)同じようにしておくれ！ 金持ちにへつらうようなことを絶対にさせないでくれ！』(一同笑う)

〔子供の頃の話——カマールプクルでイーシユワラ・ゴーシヤルという副知事に会ったこと〕

「アダル、^{現在}やっている仕事をしなさいよ！ 人は五十や百タカの給料にさえ憧れているんだよ！ お前は三百タカもとっているのに！ 郷里^{クニ}で一度、お前と同じ副知事に会ったことがある。イーシユワラ・ゴーシヤルという人だ。頭にターバンを巻いていて——皆、その人の前でガタガタふるえていたよ！ 子供の頃、見たんだがね。副知事って大したものじゃないか！

今していることを一生懸命やんなさい。一人に使われてさえ心が汚れてしまうのに、次々と別な人に使われるなんて——」

〔雇われることへの非難——シャンブーとマトウールの財宝重視——ナレンドラ、校長になる〕

「ある女が一人の回教徒^{ムスリム}に惚^ほれて、その人と話をしようと思つて自分の部屋に呼んだ。その回教徒^{ムスリム}は心の正しい人で、こう言った——『私は小使がしたので、自分の水壺を持ってこなければ——』と。女は——『ここでしたらいいでしょう。私の水壺をお貸ししますわ』男は答えた——『それは出来ない。わたしは今まで使い慣れた壺を使いましょう。新しい壺では、恥ずかしくて用が足せないから——』そう言つて男は立ち去つた。女は目が覚めた。水壺というのは、情婦の意味だとわかつたんだよ」

ナレンドラは父の死後、非常に困難な境遇におちこんでいた。母や弟妹を養うために職を探しているのだ。ボウバザールにあるヴィディヤサーガルの学校で、数日間校長の仕事をしていただけもあった。アダル「ときに、ナレンドラは仕事をするのでしょうか、どんなものでございましょう?」

聖ラーマクリシュナ「ああ、するだろうよ。母親も弟たちもいるんだから——」

アダル「さようですか。ナレンドラの家庭ですと、五十タカか百タカもあれば間に合うと思いますか——。でも、ナレンドラは百タカくらいの職を探しているではございませんか?」(訳註、アダルが千タカの仕事を得意としていることを非難されたので、ナレンドラの職探しを皮肉っている)

聖ラーマクリシュナ「俗人は財産というものをえらく重要に思つて、これに勝るものはないと考えている。むかし、シャンブーが言った——『この全財産をあの御方の蓮華の御足に捧げよう、これが私の願いです』あの御方が財産なぞ欲しがりなさるか? あの御方が人間に求めていなさるのは、ジニャーナ、バクティ、ヴィヴェーク、ヴァイラギヤ、智恵と、信仰と、識別と、離欲だ。」

お寺で神像の寶石飾りが盗まれたとき、シエジヨさん(マトゥール氏)はこう言った——『やれ、やれ、神様! あなたは自分の寶石飾りを護ることも出来なかつたんですか? ハムセシュワリー女神は、まあ何て立派にお護りなさつたことか——』

神様にとっては、寶石なんか土くれと同じだということがわからんとはねえ!

〔出家の厳しい規則——マトゥール氏が財産をゆずる相続をしていたこと〕

「(シエジヨさんが) 不動産の一部をわたしの名義にしてくれると言つてね、わたしはカーリー堂にいてそのことを聞いた。シエジヨさんとフリダイが相談していた。わたしはそこへ行つてシエジヨさんにこう言つたよ——『ねえ、余計なことをしないでおくれよ！ それは、このわたしをひどく傷つけることになるんだよ！』と」

アダル「何をおっしゃいますか！ 天地創造が始まって以来このかた、あなた様のようなお方は、せいぜい六人か七人しか生まれていないのです」

聖ラーマクリシュナ「どうして、俗世を捨てた人がそれだけだというのかい？ 地位や富を捨てると、必ず人々がそれを知るようになるものだが——。人に知られずにいる場合もたしかにあるんだ。西の方にいないかい？」

アダル「カルカッタで一人知つております——デベンドラ・タクールです」

聖ラーマクリシュナ「何を言つてる！ あれほど世間を楽しんだ人がほかに誰かいるか！ シエジヨさんといつしよにあの人の家に行つたよ。見たら小さい子供が大勢いて——医者に来ていて処方箋を書いていた。八人の息子とおまけに娘まで持つたあとで、神様のことを考えてみないようなら、いったい誰が考えるんだね？ あれほど富と地位とを楽しんだ後で、もし神のことを考えなかつたとしたら、人は、恥知らず！ と罵つたことだらうよ」

ニランジャン「あの方は、お父さん(ドワラカナート・タゴール)の負債を全部払いましたよ」

聖ラーマクリシュナ「つまらんことを言うな！ 黙つてろ！ それだけの能力があるのに父親の借

金を払わないようなものが、人々と言えるかね？

とは言うものの、世俗にだけ溺れきっているような連中に比べれば、すこぶる上等だよ。そういう連中は、彼を手本にしなけりゃいけない。

正真正銘、俗世を捨てた信者とふつうの在家信者とは、ずいぶんかけ離れている。正真の出家——ほんとに俗世を捨てた信者は蜜蜂のようだ。蜜蜂は花にだけ止まってほかにはどこにも止まらない。蜜だけ吸って、ほかには何も吸おうとしない。在家の信者はハエみたいなもので、菓子の上にも止まるし、膿うみをもったオデキの上にも止まる。神様の霊的な雰囲気うみに浸ることもあるが、また、女と金に夢中になったりもする。

ほんとうに一切を捨てた信者は、チャタク鳥のようだ。チャタク鳥はスワティー星座の雲から落ちる雨だけ飲んで、他のものは何も口に入れない！ 七つの海と川に水があふれているのに！ あの鳥はほかの水は飲まないんだよ！ 一切を捨てた信者は女と金にさわるうともしないんだよ！ 女と金のそばに行こうともしないんだ。執着が起きるといけないから——」

チャイタニヤ様デイヴァ——タクール、聖ラーマクリシュナと名聲

アダル「チャイタニヤ様デイヴァもこの世を楽しみました」

聖ラーマクリシュナ（驚き呆れた様子で）「何を楽しみなすったんだい？」

アダル「あの学問！ あの名声！」

聖ラーマクリシュナ「ほかの人からみたら名声かもしれないがね、あの方にとっちゃ、何でもないんだよ！」

お前がわたしを尊敬しても、ニランジャンが尊敬しても、わたしにとっては同じこと——ほんとうのこと言ってるんだよ。金持ちがいるからって、（私にとっては）何の意味もない。マノモハンが言っていたが——『ラカールをここに住まわせておくと陰口を叩かれかねない』とスレンドラが言っています（ラカールは当時未成年だったので、親の許可なしに長いこと親許から離れておくと、父親に訴えられることがある）わたしは言った——『スレンドラはいつたい何様だ？ 彼のござと、それから長枕がここに置いてある。それから、彼が金をくれるからか？』（訳註——スレンドラはいつも出入りしていて、ござや長枕を置いている常連の信者ではあるが、なぜ自分にそんな無礼なことを言う権利があるのか、ということ）

アダル「月に十タカずつ出しているそれでございますね？」

聖ラーマクリシュナ「十タカで二ヶ月もつよ。信者たちが此処に来て泊まるから、信者たちの接待のために彼が出しているのだ。それは彼が徳を積んでいることで、わたしにとっちゃ何でもないだろう？ わたしがラカールやナレンドラたちを可愛いがるのは、何か自分の得になるからかね？」

校長「母の愛情のようなものがございます」

聖ラーマクリシュナ「それでも母親は、子供が将来職についてたら養ってもらおうと思っていろいろ世話をしている、ということもあるさ。わたしはあれたちを、ナーラーヤナの化身だと思って愛しているんだよ！ 口先だけじゃない、心底そう思っているんだ」

〔神は正真の出家を保護してくれる——他を思うことなく専心ひんしんにわたしを思う者(キーター9・22)〕

聖ラーマクリシュナ「(アダルに向かつて) よく聞いておけ! 灯火あかりがつけば蛾はきつと集まってくる。あの御方をつかめば、あの御方がすべて何でも用意して下さるんだよ。何の不足もないようにして下さる。あの御方が胸のなかに入れば、奉仕する人びとが大勢寄り集まってくるんだよ。

一人の若い出家僧がある家庭に托鉢ぼくにいった。彼は生まれながらの出家だったから、世間のことは何も知らない。その家の若い娘が出てきて施ほどしものをくれた。出家は母親の方を向いて、『お母さん、このかたの胸には腫物はれものができていますか?』と聞いた。娘の母は、『いいえ、ちがいますよ! これに赤ン坊ができたときの用意にと、神さまが乳房をつけて下さったのです。乳房から出る乳を赤ン坊が飲んで大きくなるのです』すると出家は、『じゃあ、何も心配することありませんね? 私はもう托鉢する必要がありませんね? 私をつくって下さった御方が、私を食べさせて下さるだろうか——』と言った。

よく聞きなさい! 愛人のためにすべてを捨ててきたのなら、『さあ、あなたの胸に坐りこんで、あなたを食べましょうよ!』と言ってもいいんだよ!』

〔トーター・ブリーの話——王様がサードゥにごちそうしたこと——カーシーのドゥルガー寺の——
近くの僧院でタクルがナーナク派の指導者に会ったこと(西暦一八六八年のこと)〕

「ナンダタ(トーター・プリー)の話だが、どこかの王様が、黄金の皿とコップを使ってサードゥたちに
ごちそうしたそうだ。カーシー(ベナレス)の僧院で、僧院長がどんなに敬われているか見てきた——
大勢の金持ちやインド北西部の富豪たちが手を合わせて立っていて、何でもおっしゃる通りにいた
します！」という様子だった。ほんとのサードゥ、ほんとの出家は、黄金の皿もいらぬ、名声もい
らない。だが、何の不自由もないように、神様が面倒を見て下さるんだよ！ あの御方をさとするのに
必要なものは、何でも集めて下さるんだ(一同沈黙)。

(アダルに)あなた様はえらいお役人さま。何も申し上げることはございません！ 自分でいいと思っ
たことをおし——。わたしや無学文盲だ」

アダル「(信者たちの方を見て)——ハッハッハッハッ、この方は私をエグザミン(試験)していらっ
しゃるのですよ」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハハ。内観心(ニガリマテ)がいいんだよ！ 見ろ、わたしや給料の受
取りにサインしなかった。神だけが実在(グアスト)で、ほかのものは皆、非実在(アウアスト)——夢幻だよ！」

ハズラーが入ってきて信者たちのそばに坐った。ハズラーは時どき、「ソーハム、ソーハム(我は彼
なり)」と称えている！ 彼はラトゥたちに、「あの御方を祀(まつ)って供え物して拜むなど、無駄なことだ！
あの御方のものをあの御方に預けているにすぎない」と言っていた。ナレンドラにもいつか同じこと
を言っていた。

聖ラーマクリシュナ「(ハズラーに)誰に向かって信仰するかを、ラトゥに説明してやったよ」

ハズラー「信仰者は、自分みずからに向かつて祈っているのです」

聖ラーマクリシュナ「それはとても高い思想でね、プリンダーヴァリがバリ王にこう言った——
『あなたはブラフマンにどんな宝をささげるのですか?』と。

お前がいま言ったこと、そのことのために、靈性修行や神の御名のキールタンをしたりするんだよ。自分のなかにほんとうの自分をみつげることができたら、一切成就だ！ それを覚るための修行なんだからね。その修行をするために肉体があるんだ。黄金の神像ができ上がるまでは、土の鑄型が必要だ。神像ができ上がったら、土の鑄型は捨てられてしまう。見神できたら、肉体は捨ててもいいんだ。

あの御方は内にだけいらつしやるのではないよ。内にも外にも！ カーリー堂で大実母は、あらゆるものが靈だということを見せて下すつた！ マーがすべてのものになつていなさるんだ！ 聖像も、このわたしも、水差しも、ポットも、戸の敷居も、大理石の床も、みんな靈そのものなんだよ！

このことをはつきり見るためにこそ、あの御方に祈るんだよ——靈性修行や神の御名のキールタン。このことのため、あの御方を信仰するんだ。あれたち(ラトゥたち)は見ての通り、まだそれほど高い境地にいつていない。あれたちは信仰にすがっている。まだあれたちにはそういうこと(ソーハム——我はソレなり)を言うな」

母鳥がヒナを羽の下にいられてかばうように、慈悲深いお師匠さまであるタクール、聖ラーマクリシュナは、このようにして信者たちを護つて下さるのだ！

アダルとニランジャンは飲み物を飲むためにベランダに出た。飲んでから部屋に戻ってきた。校長

はタクールの傍にずっと坐っている。

〔四つ学位をもったブラフマ協会の青年のこと——この方と今さら議論など……〕

アダル「笑いながら」我々はさかんにしゃべるのですが、この方（校長）はひと言もおっしゃらない」
聖ラーマクリシュナ「ケーシャブの会に一人、四つも学位をもった青年（ヴァルダ）がいてね、皆がわたしと議論しているのを見て、ただ笑っているんだよ。そして言うことには、『このお方と今さら議論するなんて！』ケーシャブ・センのところでもう一度彼に会ったが——以前ほどの様子じゃなかった」

ラーム・チャクラバルタイ（ヴィシュヌ殿の司祭）がタクールの部屋に入つて来た。

タクールはおっしゃる——「なあ、ラーム、お前、ダヤルに氷砂糖のことたずねていただらう？
もう必要ないよ。十分議論し尽くしたからさ！」（訳註、ダヤルがよく氷砂糖を使うので、ラームが文句を言っていた）

〔タクールの夕食——誰のものでも食べるわけにはいかない〕

夜のタクールの食事は、大実母^マカーリーの供物のお下がりのルチを一、二枚と、スージー（上等な小麦粉）で作ったミルク粥を少々であった。タクールは床に坐つて召し上がった。そばに校長が坐っている。ラトウも部屋にいる。信者たちはサンデシユなどの甘い菓子類を持参してタクールにお供えし

た。タクールはサンデシユにちよつとさわつてラトウにこうおっしゃった——「これは、どいつのサンデシユだ？」そして、ミルク粥が入っている容れ物から、そのサンデシユを取り出した(ミルク粥の容れ物に信者の持ってきたサンデシユをのせてあった)。そして、校長とラトウの方を向いて——「わたしはみんな知つてる。ありや、アーナンダ・チャトジエーの息子の一人が持ってきたんだ——あのゴシユパラの女のところに通っている若者だ」

ラトウ「このガジャを差し上げましょうか？」(訳註、ガジャー—ドーナツをシロップに浸けたようなお菓子)
 聖ラーマクリシユナ「キシヨリーが持つてきたのかえ？」

ラトウ「これは、あなた様のお気に召しましたでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハ、いいよ」

校長はイギリス式教育を受けた人物だ。タクールは彼に向かっておっしゃる——「誰が持つてきたものでも食べるといふわけにいかないんだよ！ お前、わたしのすることが皆、信じられるかい？」

校長「はい、だんだんと全部信じることになりましたよ」

聖ラーマクリシユナ「うん」

タクールは手を洗うために西側の円ベランダに出られた。校長がお手に水を注いでさしあげた。

秋である。月が昇つて、澄みきつた大空と河面かわもを照らしている。引き潮なので、流れは南に向かっている。お口をすすぎながら校長におっしゃった——「じゃ、ナラヤンに金をやってくれるね？」

校長「はい、必ずあげますから、ご心配なく——」